

野槌

上六

4
775
229





仁和寺のあふ法印年よりまじりて仁和寺と稱す
ありてんはうくえてあふ時ありてまじりて
らよりまじりてありてんはうくえてあふ時ありて
ふよりまじりてありてんはうくえてあふ時ありて
年法思ひつるまじりてありてんはうくえてあふ時ありて
たりてんはうくえてあふ時ありてまじりてありて
のありてんはうくえてあふ時ありてまじりてありて
すのりてんはうくえてあふ時ありてまじりてありて
いひたりてんはうくえてあふ時ありてまじりてありて
仁和寺 寛平法印の法印家よりありてんはうくえて
仁和寺 寛平法印の法印家よりありてんはうくえて

石清水

貞観年中仁和寺大空寺僧行教



苑紫宇依八幡よりありし時大菩薩を以て
汝王城小幡より一我より小行て天子と獲らん
との終小行教を以て奇異に思ひてなり故小
の初り時山崎小別り主次又後に我より小
見しより終小行て見れども東向男山嶺嶺小
人なり先あり行教すれども奇異なりて初便と
ましき宇依と遊覧し初法あり也神皇正統記
公事根源元亨釋書等に記しあり

極樂寺 八幡宮護國寺別當安宗開山也縁起云大寺傳
燈大法師位安宗謹言伽藍壹院号曰極樂寺在山城國久世郡料手の上里右
件寺奉為石清水八幡大菩薩三所君達梵天帝釋天神

地祇兼而僧父母六親眷属三有法界有識無識皆悉為令
往生極樂淨土以去元慶添年始所建立也 安宗者行教
和尚之弟子也

高良 武内宿禰也日本紀よりし天武二年二月八日高良
託宣曰卷田天皇御宇為晨昏武畧之健将又公卿補任
武内神大臣孝元天皇五世孫也在官二百四十四年春秋二
百九十五年但覺年月日人不知之或云仁德天皇五十五年
丁卯覺或説かむよりハ玉垂命也

かむより かむより也

もし仁和寺法師考の法師より人より名ありて若松
しむけりし解て具に入あまより傍り足男と云

頭カシラ少づきとれつらりやうにあり紙鼻と仰ひつめて
ふと指ササ入て舞わたりふ海産具に入と限か一あり
うあぞなねんとすりにたると扱れど酒宴とてあて
いふハキんとすひたりやうとさればくびのこりり
うきて血よりたぐえれよとこみちを息もほまりたれ
おわりんまきれどやうとくれだひとをさくさか
りたればわれをさくさくやうかくてこまなるつれよ
うとびうとらうけとよとひさ杖ツエとつとをそ糸なる
らまらりおたりおてひらる道すう人たあや一とん事
限か一精師スシのりふり入てびうひわたりえん海
内こそとやうなりけり物成りまらこのらと放りひ
まてすぞかか事ふまもとんは結ぶなと一と

ねとつと又仁和寺一ゆとあつと一と若老より母を
ねとよよりおてなと悲しめともさうんともえんを
かろゆとよとものつとやうとらひ身鼻とをされ
うすも命づりらおたり生とて命たか力をとて
ひさゆとて葉コウ葉たをゆりり入りてかひを
ゆとて頭もちとびつりひあふは身鼻とをせう
げるとねをまけりかひにたきうけとえとや
とわたりたり

何ナニと云ふ目メ新ニイの字ジと鏡キョウり和名集ワナミツ説文セツモン云イハ不足
兩耳リウジ和ワ五ゴ味ミ宝ホウ契キ也ヤ 世俗セコクふとらりあはれ也
拾遺シツイ 神カミの國クニをふとらりは作サシりといふ
魚イサとてえとてんまも

かたごとく 奏^{ソウ}はまを流り 秋^{アキ}舞^{マユ}のりとも也

くものこ 邦^{クニ}代^ノを 溟^{メイ}津^ツとまうと 分^ワ明^{メイ}さうとも也

みにも 醫^イ書^{ショ}とつふ

うらうらみ 枕^{マクラ}上^ノより 枕^{マクラ}のともをりふ

かきいめり 幸^{サイ}若^{ニヤク}は義^ギ也

沖^{ナミ}家^カういみ 羨^{ソウ}思^シのありたるをいづるをいふとして
あそばんとなくむ法師ともまを結^{ムス}あるをいふ法師も
なぞかこつひて 風^{フウ}流^{リウ}の破^ヤ子^コやうの物念^{モノネン}法師いふあみ
いぞく箱^{ハコ}あぢひの物いづらめ入^イてるうびの墨^{スミ}は後^{ノチ}よ
きほようづみとまて 紅^{ベニ}葉^{エフ}ういづるをいふ思^シうぬ

さふいして流^{ナガ}あ^ハあうそ 思^シとまをいづるをいふとして
あそびひてうかこあそびめらりてあはれり若^{ニヤク}れむ
あろみをみおいていづらうこまうらうあはれあられ紅
葉^{エフ}をなん人も戒^{ケイ}淡^{タン}あらん僧^{ソウ}道^{ドウ}いのりふみまも
あどいひあうひて 埋^{ウマ}つる木のりまもむよて 教^{キョウ}珠^{シュ}
いづらり中^{ナカ}こころとまうらういづらひとまをいづるとして
あそあうまひて木の葉^{エフ}とらたのまもれどはやく
物^{モノ}もろくもほのこがひをりやあそあうねあもあく
山^{ヤマ}派^ハあれどもあうりたりうらみたりと人^{ヒト}はえとま
てあふあうらうらうらまよあそあうらうらうはあまも
いあうあうてあうらうらうらうらうらうらうらうらう
あまうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう

風流のちりこりり地 ぬらりと流へくやけり
き義なり破子とも枝花ともちりて飲合と入り
具也和名云標子今俗所云破子是也以船送入也
うこれか 咬の字也

いさうこそうくわれ いさうの甚とも傷を
痛とも葛葉にやり 保氏漢唐といさうに
ひきこたれぬ馬よこうの困れ字なり南へさ
ひきこたれぬ馬よこうの困れ字なり南へさ

紅葉とためん
白氏文集林間煖酒燒紅葉石上題詩拂綠苔
少ひちりひて 五にりふ義也
いさうなるまひて ころころひる也

つやくわみみぞ きほらうつこり破子とこり也
山とあらんとも 求也求食の字なり此食と求也
定家亦よらそこりぬもなりりたり
度ひあさぬ山のこりりに

家名ゆりやうのふとむ縁とまへ 冬にひるるの流も
まきふあつよはわらうと経ぬらうとまき事也
あ水は涼く雪かへ淡くてあぐれたり遥よまき
こまりたり物紙るる小遣戸の藪れ方よりもあり
天井れりさの冬まじく焼くし造作の用なり
はと流りりるるを面白く新乃用にもまて

よとぞ人の定あひの約

家の作りやう

造家式ハ居家必用ナリトモ

んんんん

夏とひ秋とす

楊誠齋詩矮屋炎蒸不

可居高天爽氣亦全無

あさくして流きこる

造作を用なきはと

莊子曰知無用而始可與言用矣地非不廣且大也人
之所用容足耳然則削足而契之致黃泉入尚有
用乎惠子曰無用莊子曰然則無用之為用亦明矣

久しうとてつとあひきり人の我方よありはる事
くはくは残なく積はくはくはあひかたれとて
なくるれぬ人もやどくともりいふはくはくは
次は海の人いあはくはくはくはくはくはくは
事とてつとあひきり人の我方よありはる事
よ人の物造する人あまのいあひかたれとて
てつとあひきり人の我方よありはる事
ともれくあまのいあひかたれとて
くはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
くはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
あはくはくはくはくはくはくはくはくはくは
らまぬて夫人のみぎゆあはくはくはくはくは

事など定あつりよまのうまをひきり家てりひ出
くろいとりび

あうらる海 暫シブの字とあり又白地シラチとあり
かりうめはぬ也

いさよつぎあつを 二條流サスキはあれう海
あうらるうわをてかつくあうおつさもほよあ

つそ物成ううかり
よあうぬ人を張カまをく あうをば曲マクれ乃僂カシ

言すりともあれサカシ流リなりともなりカ雷ライ同トウなり
あうまこつらあうりらてんは

ううらうらうら オホナ礼レらうらま也 源氏又新に流う
かりきと流オホナまらかりてとあり

人れらうらいでる物成物流り流のわりきとあいは
たれぬく其道とらん人らみとあひていさも
まていさもあうぬたの物とありあうらあうら
いさもあうら

道心スムシココロあうらば位流り

うらもあうらと流りらんにかうらうらあうらとあうら
道心とぬ人もあうらあうらとあうらとあうらと
いさんとあうらんと何の具とてり物とあうらとあうらと
うらみかりいさあうらとあうらとあうらとあうらと

まてらつものあれた深き（シヅカ）せむらひの
ろのろつ物者の人よなつは山林（ヤマノ）入ても鐵（テ）
まけ嵐（嵐）をさぐるよ（ゆ）がくそ（そ）のあつれ（れ）おろ（ろ）が
まの（まの）おつ（つ）つ（つ）世（世）改（改）む（む）り（り）の（の）事（事）も（も）
に（に）あ（あ）れ（れ）い（い）お（お）ろ（ろ）お（お）ろ（ろ）ん（ん）た（た）れ（れ）は（は）そ（そ）の（の）む（む）ら（ら）か（か）ひ（ひ）し（し）
は（は）お（お）ろ（ろ）ろ（ろ）は（は）な（な）り（り）の（の）事（事）も（も）い（い）ん（ん）の（の）下（下）
お（お）事（事）を（を）り（り）お（お）ろ（ろ）り（り）よ（よ）一（一）夜（夜）道（道）よ（よ）入（入）て（て）せ（せ）と（と）い（い）つ（つ）人（人）
お（お）ろ（ろ）ひ（ひ）お（お）ろ（ろ）り（り）も（も）つ（つ）ま（ま）わ（わ）ひ（ひ）お（お）人（人）の（の）貪（貪）欲（欲）の（の）こ（こ）
お（お）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）紙（紙）の（の）念（念）麻（麻）の（の）衣（衣）一（一）鉢（鉢）の（の）ま（ま）う（う）を（を）あ（あ）る（る）
の（の）あ（あ）つ（つ）物（物）い（い）く（く）も（も）く（く）人（人）の（の）ほ（ほ）ろ（ろ）を（を）か（か）ん（ん）の（の）し（し）
お（お）ろ（ろ）や（や）と（と）く（く）ま（ま）ふ（ふ）く（く）定（定）め（め）て（て）わ（わ）ら（ら）ち（ち）よ（よ）つ（つ）
ほ（ほ）も（も）あ（あ）れ（れ）い（い）ん（ん）と（と）悪（悪）い（い）う（う）と（と）く（く）善（善）い（い）う（う）と（と）く（く）

事（事）は（は）ご（ご）お（お）ろ（ろ）よ（よ）人（人）に（に）生（生）た（た）る（る）母（母）を（を）り（り）し（し）
し（し）と（と）世（世）代（代）の（の）ま（ま）じ（じ）し（し）と（と）あ（あ）つ（つ）海（海）の（の）し（し）と（と）終（終）
つ（つ）よ（よ）し（し）と（と）わ（わ）か（か）事（事）と（と）は（は）く（く）め（め）て（て）な（な）を（を）も（も）む（む）ら（ら）ん（ん）
お（お）ろ（ろ）高（高）敷（敷）よ（よ）ろ（ろ）ろ（ろ）の（の）は（は）お（お）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）

道（道）の（の）あ（あ）つ（つ）と（と）は（は）あ（あ）つ（つ）し（し） 沙（沙）門（門）を（を）玩（玩）よ

お（お）家（家）と（と）名（名）つ（つ）ら（ら）お（お）ろ（ろ）の（の）家（家）下（下）は（は）も（も）お（お）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）
書（書）よ（よ）あ（あ）り（り）又（又）釋（釋）尊（尊）も（も）樹（樹）下（下）に（に）お（お）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）
い（い）かん（かん）で（で）お（お）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）

君（君）よ（よ）は（は）お（お）家（家）と（と）お（お）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ）ろ（ろ） 忠（忠）を（を）法（法）所（所）に（に）お（お）ろ（ろ）
お（お）ろ（ろ）の（の）不（不）敬（敬）王（王）者（者）不（不）拜（拜）父（父）母（母）を（を）ど（ど）つ（つ）ろ（ろ）ろ（ろ）は（は）お（お）ろ（ろ）
お（お）ろ（ろ）り（り）又（又）棄（棄）恩（恩）入（入）と（と）な（な）る（る）真（真）實（實）報（報）恩（恩）者（者）と（と）い（い）ひ（ひ）
お（お）家（家）九（九）族（族）登（登）と（と）し（し）か（か）く（く）と（と）海（海）久（久）あり

んし縁もひりれて 本生心地觀經八云心如流水
念を生滅於前後世不暫住故心如大風一刹那間歷
方所故心如猿猴遊五欲樹故心如飛蛾愛燈也故
心如野鹿逐假声故 心随萬境轉各所實能出
よすり 多ふりなり

貪欲わらふ 法華經諸苦所因貪欲為本若
滅貪欲無所依此

紙此食

一鉢のまうけ 事文類聚前集僧道守清
禪師如何是和尚家風曰一瓶兼一鉢到所是天涯
あふれあつもの 范克夫布衾銘藜藿之其績
布之温名教之樂徳義之尊

六韜鹿裘禦寒布衣掩形粉梁之飯藜藿之羹
ははは道とひんたふぬの道此二字みま
ほせと云ふ末の及もむりぬんは道の字と
菩提と云けり本あり非
夫佛道と求は名山林も市野もくさうら
んは道と云ふべしふ人あれどもやうら
家といふまはあつるなり俗
縁もひりきて及とけりかたきれど山林
入ても亂定と云ひるされば又むりもあ
りくさくされぬ世の人の心もさうさ
ゆらりて一帯は本念の身も入るつらぬ
事くさくもさうやう也負賤をはつらぬ

とも善くもすくやとく思ふべきをけりし事なれ
世紙のうきもてこそ道とて未やとられけりなれし
高き少くもすくやとく思ふべきをけりし事なれ
わていれもまれんおれぬ俗不ていひ世間
相帯位とのひして大業の及んば若くもこりて思て
もすてあ色い氷として空の水也煩悩のあつて
うして菩提の熱柿なればとれとれわぬ
一解有りかど思ふかよふ毒いし増長して
酒のあつてり魔道よ入るは人の兼好が罪人也
稀れいしてさるるひ念の熱よりふあつて大業と
ゆいすくもさるるいりて小業は殊勝なりふ志
いふ所又我道よりいふて兼好がいふ所の及んば何

事とほや君臣父子夫婦兄弟朋友の外
たあつて人なれとて決まらるればなり事いふ
水とていふさるるいりていふとて又とす
て男女とていふも世紙のうきもていふ山林よ
ろもて寂寥枯槁なれば人倫といふ人倫
絶えりな禽獸とて兼好は世俗と高きをいひ
儒よりいふれば世紙のうきもて人倫とみざり
若く禽獸といふ道の人あり人よりいふ道と
ひりいふいふんて人紙すていふと人倫といふ
異端とていふさるるいりて昌黎が家法なり

大事を極むひたん人々もあつてせんよしかる人
こゝろをいふと遠ざかしてせんかたつとあつてせん
そゝろをいふとあつてせんかたつとあつてせん
人の物やあつてせんかたつとあつてせん
もあつてせんかたつとあつてせん
あつてせんかたつとあつてせん
あつてせんかたつとあつてせん
あつてせんかたつとあつてせん
あつてせんかたつとあつてせん
あつてせんかたつとあつてせん

水大なるむらじりも迷ひのづれとされ物とも付老
うり親いともいれま子も志恩人の情捨とともて
まてとせんや

大事を極むひたん

法華經方便品世尊唯以一大事目緣故出現於世

水大なるむらじりも

孟子豈有他哉避水火也如水益深如火益熱

きんり親いともいれ子 苑山院年十九よな

らむはふ耐悲華經おま子珍室及王位臨命終時
不隨者ともあつてせんかたつとあつてせん
家へけふ佛者ともあつてせんかたつとあつてせん
とつてせんかたつとあつてせん

これ御氣持なりとせしめてからめとせしむるに
侍りてぞ誠なりとす

貞業流威親僧都とて居んばも智恵を多
くしりて物とてのみておかくさひ多し疾義
の所せともおるさゆり神チようつてさうくおそひご
もしよわさつてくひあぐりてよみたりわづよ
しきよふ七日二七日など療治レラヂせして籠コヨイめて思ふ
やうによちあつてかゝりてさうくひてことよおるを念ネンて
善治病アチといゆり人よくさる事れたひり
りきそくひたふあめてまづあつりさるよ師シ匠シヤウを

江戸に銭二百貫と坊セニうりてゆつりさうり銭
坊と百貫さうりては是コト二万石とさうりて一石のあし
をあらうておる人よあつてけとさして十貫はごこ
つてよせて早イニヒコ流シラとさうりてさうりて又と
甲よのらうりてさうりてさうりてみかよおさうり
二百貫の物とさうりてさうりてさうりてさうりて
りの戒カエとさうりてさうりてさうりてさうりて
おのり法師とさうりてさうりてさうりてさうりて
ことさうりてさうりてさうりてさうりてさうりて
もさうりてさうりてさうりてさうりてさうりて
いふさうりてさうりてさうりてさうりてさうりて
去学キョウガク通ツウ辨ベン流リウ人ニヒトよとて宗ソウ法ホウ地ヂをシれた寺テ中チュウ

にもちのく思われたりたれ毎世成るる思ひる
曲者^{カモ}を^{コソク}勢^{シキ}自^ジ他^タよりして大方人よき事なす
れお件^{ケン}して細^キ合^カ勝^シを^シもつて何もみか人の勢
よりわ多^タを^シて^シお我^ガおよま^マぬ^ヌばやとてひ
よりお合^カえ^シ切^キら^シた^シれば^バひ^ハら^ラは^ハら^ラて^テり
り^リに^ニ非^ヒ何^{ナニ}も人よ^ニお^シく^ク定^サて^テり^リは^ハら^ラく
ひ^ヒに^ニさ^サか^カを^シる^ルに^ニも^モ曉^{サト}も^モ合^カえ^シた^シた^シれ
畫^エも^モを^シこ^コの^ノて^テい^イろ^ロ移^シり^リ大^{ダイ}事^ジあ^アれ^レも^モ人^ニの^ノ不
し^シき^キい^イま^マは^ハ目^メは^ハあ^アぬ^ヌれ^レハ^ハ箴^シ訓^{クン}も^モい^イぢ^チん^ンと
そ^ソま^マし^シて^テう^ウき^キぶ^ブき^キあ^アり^リと^トれ^レど^ド為^シ常^{ジョウ}な^ニぬ^ヌ油^ユは^ハれ
ども人よ^ニい^イふ^フも^モぞ^ゾよ^ヨあ^アり^リゆ^ユり^リた^タり^リは^ハの^ノつ^ツた^タれ
こ^コり^リの^ノや^ヤ

法^{ホウ}統^{トウ}
威^イ親^{シン}僧^{ソウ}都^ト

い^イま^マが^ガ

芋^{イモ}頭^{カサ}も^モ芋^{イモ}料^{リョウ}も^モう^ウけ^ケり
然^{シカ}と^ト料^{リョウ}足^{ソク}と^ト云^{クニ}ん^ン也^ヤ

あ^ア

あ^アら^ラう^ウゆ^ユり^リと^トあ^アら^ラふ^フの^ノご^ゴや^ヤ云^{クニ}

義^ギあり

法^{ホウ}打^{ダウ} 佛^{ブツ}法^{ポフ}と^ト控^{コウ}め^メる^ルも^モあ^アら^ラ也^ヤ 佛^{ブツ}打^{ダウ}佛^{ブツ}打^{ダウ}な^ナ

ど^ドん^ンと^トも^モい^イ義^ギあり

ら^ラれ^レひ^ヒじ^ジ

佛^{ブツ}家^カ法^{ポフ}小^コ一^{イチ}合^{カウ}も^モて^テ日^{ニチ}中^{チュウ}と^ト云^{クニ}

て^テハ^ハ物^{モノ}と^トら^ラん^ン成^{セイ}一^{イチ}人^{ニン}の^ノ妙^{ミョウ}跡^ジあり^リて^テ一^{イチ}友^{ユウ}此^シ爾^ニ

飲^{イン}み^ミを^ヲく^ク糸^{イト}た^タれ^レハ^ハ佛^{ブツ}ゆ^ユり^リと^ト曉^{サト}り^リ又^{マタ}う^ウ

せ^セを^ヲ非^ヒ時^ジと^トも^モ思^シひ^ヒ律^{リツ}も^モん^ンと^ト云^{クニ}は^ハ威^イ

親傳那ののしし〜とこのみ〜のり事
このふり〜のり事〜

編身通論十八云 南嶽明瓚禪師者不知何許人
初宰相李泌乾元中辭入衡岳瓚隱居上封泌往謁之
瓚誦經其色先悲悽而後悅豫泌雅知音因謂曰將非
避隱者有雲霄意乎瓚唾之曰莫相賊莫相賊泌也不
為動瓚久見泌立候不解乃曰飯未泌曰未也瓚撥
火出芋食泌與語久辭去瓚撫其背曰好做十年宰相
至是泌用事為帝言其高行有詔徵之使者至石崖
宣麻命曰尊者起謝恩瓚寒涕垂願凝坐略不以介意
使者歎其淳正不之迫回奏其事帝咨羨之數四不巳
瓚嘗著歌曰飢來喫飯困來即眠愚人笑我智乃知焉

不是痴鈍本體如然要去即去要住即住

東坡七云他年托北味芋火對懶殘注唐李泌與

明瓚禪師遊明瓚杖徒謂之懶殘者懶殘性懶

而食殘故以為号事見高僧傳

印月江贊懶殘云芋魁從北價連城

遵生八牋六高瀟冬時幽賞雪夜煨芋談禪云雪

夜偶宿禪林從僧擁爐旋摘山芋煨剥入口味較市

中羨甚欣然一飽因問僧曰有為是禪無為是禪有

無所有無非所無是禪乎僧曰子手執芋是禌更從

何問余曰何芋是禪僧曰芋在子手有耶無耶謂有

何有謂無何無有無相滅是為真空非空非非空空

無所空是名曰禪執空認禪又看實相終不惜禪此

精進力到得惠根緣未能頓覺子曷觀芋乎芋不
得火口不可食火功不到此芋猶生須火到芋熟
方可就齒舌消滅是從有処飯無芋非火熟子能
生嚼芋乎芋相終在不滅手芋嚼盡謂無非無
從有未謂有非有有從無滅子手執芋今着何処
余時稽首慈尊禪從言下喚醒

威親僧都のつらまひ誠は凡人のあつた懶殘
は似たり錢二方尺と芋泥の價もそつとるは
かの芋火とつらまひして李必は逢鼻流とつらな
がう勅使よむつらまひ異つらつとつらまひ
くい移じつらまひの書も眠付ハ彼飢餓困睡

よ同く宗法打つらまひ波嶽頭一生禪はひ
つらまひつらまひつらまひつらまひつらまひ
規子布袋政黃牛端獅子が類も又つらまひ

湯産のつらまひつらまひつらまひつらまひつらまひ
うづら肥夜つらまひつらまひつらまひつらまひつらまひ
つらまひつらまひつらまひつらまひつらまひつらまひ
つらまひつらまひつらまひつらまひつらまひつらまひ
つらまひつらまひつらまひつらまひつらまひつらまひ
つらまひつらまひつらまひつらまひつらまひつらまひ
つらまひつらまひつらまひつらまひつらまひつらまひ
つらまひつらまひつらまひつらまひつらまひつらまひ

湯産の時つらまひつらまひつらまひつらまひつらまひ
つらまひつらまひつらまひつらまひつらまひつらまひ

底以青の河以反此栎より醜と轉くす事あり

皇子の誕生より南一宮より皇女誕生より少

落とと是ハ少一落より少ハ少いさねと

落とより少ハ少い事ハあやふ事あり

既和名集云將醜切韻云醜音時勝同和炊飯器也

以胎衣神代卷及至産時先以淡路洲為胎

こあり胎衣と名ふともありほの物のこと也

あはれき宝珠の繪儒書佛去園繪日本

如部録歎去等よりさうに種とて宝物にた

つり派宝珠と云宇治法住室は蓮華王院の

寢室寢室東大寺の此説也

此所皇居元妃御産の所執事あり是事あり也

あもさき人のさる事と定むるよりあはれ果

賤の物より事おこりたり也

詩小雅斯干篇乃生女子載寢之地載衣之襦載弄

之尾朱子曰尾紡時所用之物舊見人畫列女傳漆

室室女手執一物如今銀子様者意其為紡杼也然未必

詩よ云は尾ハひきろをり物ぞく人さるふ物也

朱子列女傳此繪の女のさるよりさる物と見てお

れるりべし人よあはれなりゆゑ好か醜落

すこと所宝珠は絵と見て考合さるる字あり

とよりさる

延政門院ニシノの記ノをたねくつりしル者ノ時院ノ内侍
人ノよりノつてノそのノゆニひニつゝシテゆニづミみセしキり
もどノ牛ノ角ノをノとシてノいハふニきルひニまシるニよリしテゆニづミみセしキり
者ノのノねノがノゆニりノこノひノしノをノ思ヒひニまシるニよリしテゆニづミみセしキり

延政門院ノ後ノ嵯峨院ノのノ旨ノあり
こノたノたノいハふニきルひニまシるニよリしテゆニづミみセしキり

ねづノひノもノとシてノいハふニきルひニまシるニよリしテゆニづミみセしキり
きニいハふニきルひニまシるニよリしテゆニづミみセしキり
しニもノもノ知ルしノねノもノもノをノゆニづミみセしキり
もノもノもノもノもノ明ノ魏ノ注ノ作ノのノまシるニよリしテゆニづミみセしキり
つノひノもノとシてノいハふニきルひニまシるニよリしテゆニづミみセしキり
よノもノもノもノもノ事ノ文ノ類ノ聚ノ引ノ白ノ氏ノ文集ノ

注ノ云ノ鄭ノ玄ノ家ノ牛ノ觸ノ牆ノ成ノ八ノ字ノとシてノありノ牛ノはノ角ノをノとシてノいハふニきルひニまシるニよリしテゆニづミみセしキり
ありノてノそのノありノ八ノのノ字ノをノとシてノいハふニきルひニまシるニよリしテゆニづミみセしキり
のノ字ノとシてノ牛ノのノつノがノ一ノとシてノいハふニきルひニまシるニよリしテゆニづミみセしキり
もノもノもノもノ

散ノ山ノのノ縁ノ起ノはノ陰ノにノとシてノ横ノのノ一ノ点ノとシてノ横ノのノ一ノ点ノ
よノ陰ノ乃ノ三ノ点ノとシてノ山ノ王ノとシてノいハふニきルひニまシるニよリしテゆニづミみセしキり
とシてノいハふニきルひニまシるニよリしテゆニづミみセしキり
横ノのノ一ノ点ノとシてノいハふニきルひニまシるニよリしテゆニづミみセしキり
樂ノ有ノ解ノ經ノ井ノ迷ノ也ノ二ノ八ノ三ノ八ノ飛ノ泉ノ仰ノ流ノ蓋ノ二ノ八ノ三ノ八ノ
為ノ五ノ八ノ五ノ八ノ四ノ十ノ也ノ四ノ十ノ為ノ井ノ字ノ故ノ錢ノ昭ノ度ノ食ノ梨ノ詩ノ
二ノ八ノ飛ノ泉ノ繞ノ齒ノ察ノ
是ノもノ夏ノ文ノ類ノ聚ノ續ノ集ノのノ載ノりノ六ノ井ノ謎ノ也ノ詩ノとシてノいハふニきルひニまシるニよリしテゆニづミみセしキり

てこれハ延政門院の口方も和方れをさしつゝあり也

後七日は阿闍梨武者とあつひり事一とくや盗人よ
あひみりるより宿直人こそかくこころをさたりり
せり一年の相々ハ修中おつりはるめこそ見ぬれ
を共に用ん事とさぶやうをぬこ也

ほ七日 公事根源云真言院御修法正月八日より
七日はこころの年金剛尊のハ明年ハ
昭藏元年よりさうさう修中修中七日は御
修法ハ公事也天長六年に弘法大伴大廣の
内道場ハ准して真言院と云申しとさうもて

兼和元年より大伴即ちハ法と初めりる
東寺一の長者我々坊もて元日より行ひて八
日より七日のる真言院もて修中修中七日
と申也禁中元日より白馬は節會もて
公事多きゆへハ沙門ありて八日より修中あり
仁明天皇の時大内中務省もて弘法大伴大廣
法と修中と表とさうて永代の親式とさう
めんと申りありにばりて勘解由司は麻をぬん
志云修法流と云今ハ真言院是也八日よ
開白して十四日は結願りて大伴請來れ
袖衣とさう暴祖附属は五銚を指して玉解
ありのき二寶は香ありを指して灌さなり又

群臣にも灌く也

阿耨梨 名義集 阿耨梨 或阿祇利 或阿遮梨耶

唐言 乾 乾 隋言 正行 能 糾正 弟子 行 故

一年のおお此修中 身おほくめの事祈禱修

法なるに誓固と号しして武士兵をて用てさかじ

夫事一歳乃相とてやうやくぬくまふ也

車乃五緒を必人よようばやどにのぞきてまゝの
はるゝ位よりしらとぬもことつる物なりとてあふ
人おふとれ
車乃五緒

簾

青編糸五緒一ツ

文藍革縁

文小鞞繪

裏ノ縁ハ青唐綾

上緒不入草崎

車乃五緒の事と昔味多しとてのゆえに
右のどくくまてぬいせり

此乃乃冠をむじりしよりまはるゝにさうくする
かりとらあふ人たをきりて古代は冠柙をもち
多し人をさるゝはははとて今用るなり
冠柙と冠箱也まげ物葉をて漆ぬり
しお地まはるゝとておのぬと綿

しそく

しそく

冠紳のしそく

本朝のしそくは冠紳の製法は代に代を異にするが不同

あれども中をより唐國の衣冠をとり

故に宋濂が日東曲に十年猶效漢衣冠

作まらざる

石林燕語余見大夫家居及燕見賓客率多頂帽

而繫勒帛於其甚服背子帽下戴小冠簪以帛作橫

幅約髮号額子処室中則去帽見冠簪或用頭巾也

古者士皆有冠帽乃冠之貴制頭巾賤者不冠之服

耳勒帛亦有垂紳之意雖施之外不為簡背子亦半

辟武士服何取於礼乎或云勒帛不便於播笏故稍

易背子然須用上襟掖下共背皆垂帶余大觀間

見宰執接堂吏押文書於冠帽用背子今亦廢矣

而背子又引為長袖共半臂製亦不同裏賤者巾

衣武士服而習俗之久不以為異古礼之廢大抵衰

世也

夏文彰聚續集通天冠天子所冠漢制衣

祭礼无文祀天地明堂平冕鄙人不識謂之平天

冠蔡邕独断進賢冠古緇布冠儒者之服也前高

七寸長八寸後高三寸一梁下大夫一命所服兩梁

再命大夫二千石所服三梁三命上大夫公侯所服

三梁四命野夫黃冠草服也郊特牲法冠一曰柱

後柱後高五寸以緋為展簪鉄柱卷執法者服之

後惠文

或謂之獬豸冠カイツチ獬豸神羊能別曲直楚王嘗獲
 之故以為冠輿地志御史侍中金蟬尤詔送官俊
 武冠俗謂之大冠環纓无莛以青絲為纆加双鷗
 尾尾登尤右為鷗冠云鷗者勇雄也故趙武靈王以
 表武士秦施之鳥日上

岡本閑白及威カクなり紅梅ベニウメはるるト鳥トリ一ササ双フタとそる
 ては枝エダより流ナけて下シつクまアぶヨいク津ツ寄ヨ飼シ毛モ
 野ノ武ブ勝シはハ依ヨりレらルり又花ハよリつクふシ
 べクりまあらうのば一枝エダおもろくらり事コトもな
 知らずと中にたれハ膝ハ部ハ小君とれ人ハいまもとりを知ら
 いて又武勝ブシカクにまらバたの色ハ思ひんやうよつをて

ゆつつ坊とくおもろくましきようりたれは花より梅ウメ乃ハ
 枝エダよいひのを付てまのせり武勝シウメ乃ハ
 柴ハの枝梅ウメの枝つゆらりとちりとらりといつく五
 葉エハおもろくもはく枝おもろく七人或ハ六人也一といふ
 れをらにまはら枝の末と付はくは枝おもろくすら
 んどありまあらう花ハおもろくなまも二三とあらはなべく
 友トモのあらはひららおのととらららときりて牛ウシ角カク
 此カらうにはいむむむ初ハツ雪ユキれあらう枝エダをくらに
 うをそく中ナカ門カドよりあらまひてあらまみさらしののつ
 とつといひて雪ユキにあらまつけてあまなわかひのもと
 をこしく花ハららとらとらと二株スズクの葉は高欄カウランりよ
 坊ハツやく緑キナンドをいらられかららけて拜イハしてまると

ぞく初雷くくして事も尚れよなのかくさねやどの雷
 月を浦のくぐもあふれわひの毛をちりちりあらしは
 鷹トカのよもあしつはな事あれは鷹トカのやうくく
 うーをりてーくくさるるはをさくくはひを
 うねよりあつて長月のけり梅のほくくす枝よ
 雉キチのよきと君がなすくおはたのけしちわね
 うりくく伊勢物語よるくくはくくはくくはくく
 くねくや

室中シカモトは開白 家平イニヒラ公也 大織冠オオオリモノ廿四代の子孫
 近衛コノエ友房の二海ありり

太政大臣 関白イニヒラ 関白イニヒラ 関白イニヒラ 関白イニヒラ 家平イニヒラ 經忠ノリタカ 經家ノリノ
左大臣 經平ノリヒラ 基嗣モトツギ 基平モトヒラ 家基イニヒラ
近衛 兼經カネノリ 基平モトヒラ 家基イニヒラ 經平ノリヒラ 基嗣モトツギ 基平モトヒラ 家基イニヒラ
号 深心院 号 浄妙寺 号 後浄妙寺 号 後園屋

付鳥枝事 柴高シバノタカ七人寺 普通フツウに 栞本シラキよりハ
 葉ハをさくく園マロくくしてうくちりてくく毛おひりり
 毛をさく付留トリスル柴シバも也 一祝イツイ云たりん柴シバも云
 もの也 年の月ハ三枝サンエダを為さくく雄ウメをたよあ
 けて付て雄ウメをさげて付て年トシ的てハ雌メをたよ
 けをさく付り春ハルの雄ウメを貴キズナを存ツク也付り
 口傳クハツタ成采セサイを用らるる 庭ニワまハ梅秋ウメアキハ紅葉カキハ
 けり事 常トコに義也 右ミダマ大總オホソウの對タテ是を用ら

又初雷此物維と人よはるる其時の作法也又
鷹野より人のりくつる其に二三人の其の枝
と刀め紙付をくして本とおくうのて付
る也一双を付るやうくくく人なり泰兼
別説

又四條大納言澄親は元承のうけ六七八年雄
一双を付る也又大仁大總元胎移徒如是時用
之産成(毛)の根びきお小松も付也義氏朝臣
説 鷹野より人のりく維を送りよと宗を
う初も疾汚とくくめく何れも付也一説は
松も鳩と付る事あり山鳩也義家朝臣
以後不付く鶴と六疾汚の枝も付小島とて紅

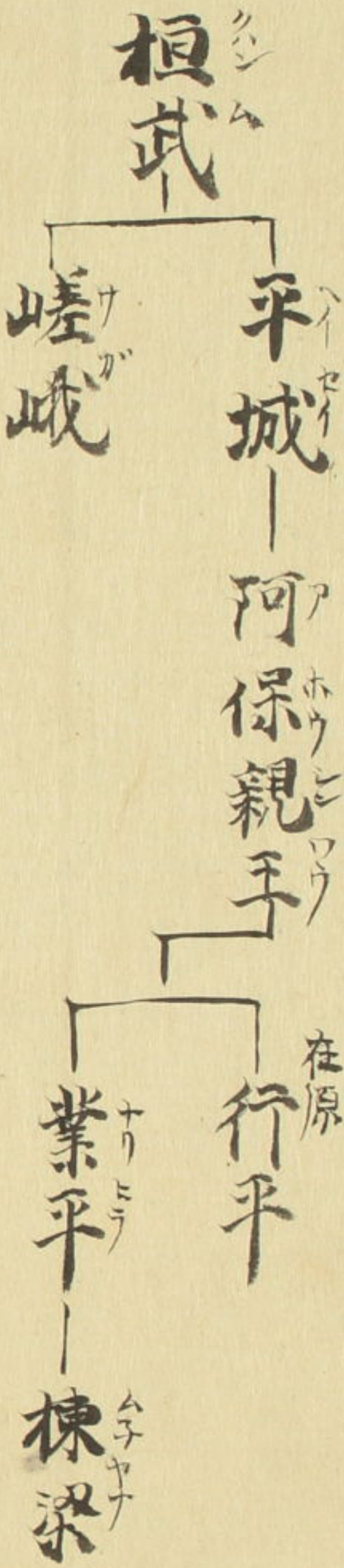
葉は枝も付るる雀と八竹は枝も付る也十月
月六日(宇)付く云沖宿銅式久う説也並
見河海抄
下毛野式勝 續日本紀などあり下野園も
下毛野園とあり安めて八式と云くあり
か一刃 本行よりくばるるきりよとてと
うくともありとくくをくく刃と云
雷よあはは 初雷は初と六條とほをくく
先知くくぬ人と説られ
あはるるぬひの毛

たふちつけどふ あれより山下イオン異なりぬ
ふみ武勝がたふちつるふまへあつどとちよ對
しとふりり 伊勢物語じりーぬるさか
いまうら若とゆゆりねりーりりはううふりり
たふち月いりり又梅のつりり梅よあしど
きとちりりこつらたのじちあつあつおつた
けーもつらぬゆーどちりりともてちりりた
いとちりりちりりーかちちりりつひよ祿多戸
ちりりり

賀茂イハモト若木橋ナリヒラ本八業平實方サチカマナリ也人此常よひ
下ぐゆれれ一年ありりちりりちりりちりり

ちりりちりりちりりちりりちりりちりりちりり
のちりりちりりちりりちりりちりりちりりちりり
ねちりりちりりちりりちりりちりりちりりちりり
いしちりりちりりちりりちりりちりりちりりちりり
ふはちりりちりりちりりちりりちりりちりりちりり
うちりりちりりちりりちりりちりりちりりちりり
いせちりりちりりちりりちりりちりりちりりちりり
ちりりちりりちりりちりりちりりちりりちりりちりり
わちりりちりりちりりちりりちりりちりりちりりちりり
のちりりちりりちりりちりりちりりちりりちりりちりり
ちりりちりりちりりちりりちりりちりりちりりちりり
席をどいりりちりりちりりちりりちりりちりりちりり

山崎の業平也 杉平の實方也



業平 三良彈正河保親王第五男也故号在五中将母

桓武女伊豆内親王也 年月日任左近将監兼和十

四年正月補藏人嘉祥二年正月七日從五位下負觀

四年正月七日從五位上五年二月十日左兵衛權佐

六年三月八日右近少将七年三月九日右馬權頭十

一年正月七日正五位下十五年正月七日從四位下元

慶元年正月十五日左近權中將十一月廿一日從四

位上二年正月十一日相模權守三年十月載人頭

四年正月十一日美濃權守日廿八日卒年五十六

天長三年河保親王上表曰無良高岳親王之男女先

停王号賜朝臣姓臣之子息未預改姓既為日公之子

寧異齒列名於是詔仲平行平守平等賜姓在原

朝臣業平躰兒剛麗放縱不拘畧無才学善作和

歌評見三代實錄

忠平 負信公 五條九大臣 侍從五位上 右中將正四位下陸奥守長徳四年十一
師尹 定時 實方 月十三日於任國卒

孫尔實方八中將也成一人也禁中一之行成
心いあゝそひありて符とちあゝるる各よ依て
欣抱とんそゑんそ奥別一はるは海則修地とて

卒^{ニユラスト}其^ニ後^ニ西^ニ向^シト向^シてくらもせぬを^ハ衣^ハの^ハり
とらり^トとらり^トとらり^トの^ハせ^ニあ^リる^ハい^ハみ^ハぞ^ハる^ハり^ト
よみ^ハく^ハも^ハ也^ハ ^{載^ハル^ハ事^ト}一^ニ条^ト流^ル時^ニま^ハ方^ニ中^ニ將^ト果^レ列^ス
病^タて^レ所^ニ古^ノ野^ノの^ハ杉^トと^シて^ハら^ハる^ハも^ハあ^リる^ハ人^ト
一^ニ國^トと^シて^ハあ^リる^ハら^ハる^ハて^ハ二^ニ河^トや^ハあ^リる^ハ河^トま^ハの^ハ松^ト
く^ハと^ハあ^リる^ハあ^リる^ハら^ハる^ハり^ト入^ル実^方馬^トの^ハり^トを^ハ果^レ
名^ハを^ハは^リる^ハ笠^ト島^ト道^ト社^ト神^トの^ハ前^トと^シて^ハら^ハる^ハり^ト下^ルる^ハせ^ト
人^トの^ハり^トを^ハは^リる^ハも^ハあ^リる^ハら^ハる^ハ馬^ト成^ルた^ハと^シて^ハ實^方も^ハ
た^ハま^ハ死^スら^ハり^トその^ハ社^トの^ハま^ハに^ハ埋^ルじ^テ靈^化して^ハ存^ス
り^トて^ハま^ハ城^トと^シて^ハあ^リる^ハあ^リる^ハま^ハの^ハ基^ト盤^トと^シて^ハ鳴^ル
り^トり^トり^トり^トり^ト

吉水^{ヨシノ}和尙^{ワニヤウ} 法性^{ホウセイ}寺^ジ関白^{関白}忠通^{忠通}公^公子^子也^也久壽^{久壽}二年^{二年}乙亥^{乙亥}
四月^{四月}五日^{五日}生^生法^法律^律道^道快^快養^養和^和元^元年^年十一^{十一}月^月六^六日^日改^改名^名
慈^慈園^園山^山門^門六^六十^十二^二代^代座^座主^主居^居東^東山^山吉^吉水^水嘉^嘉祿^祿元^元年^年
九^九月^月廿^廿五^五日^日滅^滅年^年七^七十^十一^一嘉^嘉祿^祿三^三年^年三^三月^月八^八日^日溢^溢慈^慈鎮^鎮
吉^吉水^水ハ^ハ々^々の^の丸^丸山^山形^形ト

月^月と^とめ^めで^で め^めで^でハ^ハ愛^愛少^少の^の義^義あり^り
今^今出^出河^河院^院迄^迄流^流 々^々ハ^ハ河^河院^院と^とハ^ハ新^新山^山院^院の^の后^后市^市盤^盤
井^井相^相國^國實^實氏^氏公^公孫^孫中^中宮^宮姫^姫子^子也^也即^即西^西園^園寺^寺公^公相^相
公^公の^の孫^孫也^也弘^弘安^安六^六年^年八^八月^月十^十二^二日^日為^為尼^尼 一^一文^文保^保二^二年^年
四^四月^月十^十五^五日^日崩^崩年^年六^六十^十七^七
近^近清^清と^と道^道清^清也^也大^大炊^炊津^津門^門度^度流^流大^大納^納言^言伊^伊年^年女^女也^也
伊^伊禰^禰卿^卿覺^覺道^道上^上人^人實^實伊^伊僧^僧正^正也^也の^の母^母也^也井^井蛙^蛙

抄云近衛局九歳此時より^{アツコ}琴水といふ方とみ
 續古今よりこのころに^{カバ}五代の勅撰をなして方教
 もあましく入流なども作り^{カチ}勲集にも入佛法
 ももまゝ入一生不^フ犯の福たりり法華經十萬部
 もなれり^{ミヤツカ}あはれども皆ぞ續古今の時
 有月に^{アヤノ}葛蒲^{カサネ}重^{キヌ}夜とて今も川原中宮に
 ありて^{ゴジ}檢大納言とりて^ク秋ふつとく
 優美^{ユウ}より^{ユキ}角^{カク}も一人也 新檢遺 今も河内近衛
 候ても程もふ^クね^クあ^クつと^クのつと^クた^クも^ク心^クな
 うひねられた

後^{ツシシ}葉に^{アワシヤウシ}あ^クわ^クり^ク押領使^クを^クと^クり^クや^クら^クり^クの^クあ^クり^ク
 ち^クり^クが^クお^クわ^クい^クひ^クと^ク新^クよ^クみ^クが^ク茶^クを^クお^クも^クと^クり^ク
 つ^クげ^クや^クま^クを^ク合^クけ^クり^ク事^ク年^ク久^クく^クら^クり^クぬ^ク或^ク時^ク館^クの^ク
 内^クよ^ク人^クも^クら^クり^クり^クり^ク階^クと^クけ^クら^クり^クて^ク歌^ク樂^クあ^クり^クて^クか^クみ
 ち^クあ^クり^クり^ク館^クの^クう^クら^クに^ク兵^ク六^クと^クて^クま^クを^ク命^クと^クり^クま^クら
 致^クひ^クて^ク消^クは^クい^クて^クお^クり^クつ^クを^クあ^クつ^クふ^クえ^クて^ク
 日^クは^クあ^クま^クの^クあ^クま^クも^クぬ^ク人^クも^クあ^クか^クく^クを^クあ^クひ^ク
 ね^クい^クつ^クを^クり^ク人^クも^ク同^クた^クれ^クし^ク年^ク来^クま^クあ^クり^クて^クお^クか^クく^ク
 め^クい^クほ^クり^クお^クわ^クい^クひ^クの^クあ^クま^クり^クあ^クま^クつ^クひ^クて^ク夫^クも^クけ^クり^ク
 少^クく^ク伝^クと^クい^クて^クお^クも^クば^クか^ク法^クも^クあ^クり^クあ^クり^ク

押領使 東鑑七云鎮守府將軍兼陸奥守從五
 位上藤原朝臣秀衡法師出羽押領使基衡男曰

九云秦衡又治三年十月絶天遺跡者出羽陸奥

押領使菅類六郡此ノ筑紫ノ押領使ト

ソ何ハ出羽奥列ノカキ

出羽月杯 大根也 和名云爾雅集注云菖音福 和名

於保林俗用 根正白而可食 兼名苑云菜菔音木 本

大根二字 草云蘆菔 孟詵食經云蘿菔上音羅 今案菜菔蘿 菔皆菖ノ通稱也

皇朝類苑六十八云菜只中蕪著菘芥ノ類遇旱其

操多結成花如蓮花作龜蛇ノ形此常性無足性者

熙寧中李賓知潤州園中菜花悉成荷花仍各有

一佛坐于花中形如雕刻莫知其數暴乾其相依

然或云李君ノ家奉佛甚篤因此有異

書寫上人ノ法華讀禪ノ功シヨシヤ 功ほりりそシニシヤ 根淨シニシヤ

水ノ人シヨシヤ 也 様シヨシヤ のかりシヨシヤ 立シヨシヤ つシヨシヤ れシヨシヤ りシヨシヤ 巨シヨシヤ の

くシヨシヤ 深シヨシヤ さシヨシヤ 深シヨシヤ てシヨシヤ 巨シヨシヤ とシヨシヤ 煮シヨシヤ りシヨシヤ 香シヨシヤ のシヨシヤ つシヨシヤ ぶシヨシヤ くシヨシヤ とシヨシヤ するシヨシヤ

如シヨシヤ れシヨシヤ へシヨシヤ らシヨシヤ やシヨシヤ のシヨシヤ むシヨシヤ のシヨシヤ ちシヨシヤ うシヨシヤ もシヨシヤ うシヨシヤ りシヨシヤ くシヨシヤ 我シヨシヤ とシヨシヤ 小

煮シヨシヤ てシヨシヤ かシヨシヤ じシヨシヤ めシヨシヤ ぬシヨシヤ へシヨシヤ ちシヨシヤ のシヨシヤ ひシヨシヤ たりシヨシヤ 乃シヨシヤ ちシヨシヤ やシヨシヤ まシヨシヤ ぬ

わシヨシヤ じシヨシヤ らシヨシヤ うシヨシヤ くシヨシヤ とシヨシヤ ちシヨシヤ らシヨシヤ ちシヨシヤ 深シヨシヤ 心シヨシヤ よりシヨシヤ 出シヨシヤ けシヨシヤ しくシヨシヤ や

うシヨシヤ 深シヨシヤ 心シヨシヤ のシヨシヤ ちシヨシヤ らシヨシヤ 堪シヨシヤ ぐシヨシヤ べシヨシヤ れシヨシヤ ばシヨシヤ 力シヨシヤ 好シヨシヤ さシヨシヤ 事シヨシヤ ありシヨシヤ かシヨシヤ く

かシヨシヤ 恨シヨシヤ しみシヨシヤ りシヨシヤ ともシヨシヤ ぞシヨシヤ びシヨシヤ しくシヨシヤ べシヨシヤ けシヨシヤ

書寫の上人 性空平安城人從四位上橋善根子也

母源氏空十歳持法華三十六出家乃往日向國霧

嶋結庐而居永延二年化人來告曰播摩書寫山是

鷲嶺之一峯也居此者發菩提心得六根淨空至山

結庵西洞茅薦為席紙楮為衣山鳥野獸未自馴
 創寺曰圓教寺空於山中每年三九月轉法華為國
 民之福增賀法師在多武峯來上紙空送賀歎息
 曰性空者其淨六根者欽寬弘四年三月十三日誦法
 華而宗年八十 元亨秋書及撰集抄あり有之

六根淨 眼耳鼻舌身意と六根と云

大豆れり〜をきよめて 世説曰魏文帝嘗吟東阿王
 曹植七步作詩不成者當行大法應色為詩曰煮豆
 持作羹漉豉以為汁其在釜下然豆在釜中泣本自
 同根生相煎何太急帝深有慙色 曹植字子建魏曹

操子文帝弟也

は辰也非情の物よものといふを辰也辰也非情は
 物よ精矣とありつとて是陳思王が豆其詩ありと
 つき性空は六根淨と引合とつても又莊子
 が罔西の罔谷標社樹は養龍をの教也ひひ
 たり〜とほせぬ梅聖俞が四禽言東坡梅翁が
 五禽言山谷が禽語は和養らるる禽意の戯也
 無住法師の沙石集と見ゆり〜に南都に
 ありて學士は坊のやよりよて蟻と蝸と官養
 て前後あれは蟻と云何と輪子ともありと云
 ぎふきたまてふ輪子の名と降るり也青の
 よらゆをそ谷と似たり〜と蝸と云何とて罔子と

もたしとふどけりさうにほてふ園子は名紙たる
あもともり魚好が筆力いそゆ信作にまきりて
そそゆるうれ律呂よくききまは鳥獣の
聲ともえりきなりか首序を牛鳴とぞみし三枝
さうゆん事をとまり公治長は鳥雀は妙き
顔淵を相山四鳥好なりれとまり劉三渡は馬
一色一白電年の禽雀りきりきりいれはよく
香とえりもの風声鶴唳とぞもあつぎる事
れ〜とつひつ〜と〜と〜と蔡中良が桐を履く犬
声とえりて〜と〜と〜と琴材なり事とるあきもさ
わく信だり物おとお大板も我兵とるき多う
〜と〜とのま〜と〜と山好ゆよも歌のそとみゆき

とら身は巨真の好もほろろれはものま風
きりも歌は声とあつ〜と〜と〜と信教迷悟わく
あるりりり〜と〜と信法の沈法といも〜と溪声の廣長
古あり水鳥樹林念佛念法は〜と〜と性空は
ゆれ〜と〜とけ〜と〜と魚好い〜と〜と思ひ〜と〜と九
奈に〜と〜と若又魏榆の皮の〜と〜と社
草本よ〜と〜と〜と〜との教は〜と〜と事よ〜と〜と吾
邦は〜と〜と〜と〜と松沛代のひり〜と〜と山松は
〜と〜と〜と松葉もゆり〜と〜と〜と

元
蘇乃清
巽堂
九
沖
松
と
玄
と
や
せ
り
り
菊

そんれ者物説ときうてもははの人お家のうに証を
ぞんらんこえん人もとらる人お中又おひよそ
うらうら物もかくさうらや又お何なりおらうら
い中人乃ま事し月もるあり物も証のうらうら
事おのさうらやうらうらお何なりおらうら
おのさうらまらうらうらうらうらうらうら
かくれりよあや

名とゆひより
熊孺登贈侯山人詩一見清容愜素聞有人傳是紫
陽君

伊やまげをり物おらありありに調度お何なり
に筆乃お何なり持佛堂に佛のたれも亦裁ぬ不
草瓜のお何なり家のうらうらに子孫お何なり人よひて
洞お何なり預えり作者たれもおのさうらお何なり
てんぐりうらうらぬい又車お何なり又塵お何なり
洞おのまらうらうら又源順お何なり倭名集にも
調度部お何なり上中下あり佛僧具圖書具武
具衣服器具馬具お何なりお何なり法物具を
載らる物もハ一切お何なりと調度お何なりお何なり
洞氏お何なり洞お何なりお何なり
お裁ぬお何なりお何なり庭に奇樹お何なり
あつめてお何なりお何なりお何なりお何なりお何なり

土夢作以玄亦繳續亦繳不曰玄續繳而曰玄繳續
世文法也

莊子養生主云庖丁為文惠君解牛手之所觸肩
所倚足之所履膝之所踦者然嚮然奏刀騞然口義
云者然嚮然皆是其用刀之聲却以奏刀兩字安在
中間文法也

野槌上之五

於砥用手永原町自文政十丁亥冬
十一月廿四日至同廿五日字之

中村直道

世にうらりほふる事内々々あいなきや
おかくは清言也ありあもるて人の物といひ
あはまきして年月を境もつごりあまに
いひこきよくに清くして筆はもかきこめ
おれはやがて又さりぬ道は物の上の行
うさ事あるかゝるかあは人のそのみあり
らぬらうとあま津のこゝろもたえれぬ
人のまに信もたえしんをいふまゝなる所
何事もかゝるものありあつあつらゝるま
つりのまじほよアウせていひらゝるやがて
きこふこゝろの又我も滅しゝらあひら
がら人のいひまゝに異はあはたあゝるや

うの人のうらまへもいさげしむ
 うらまへのうらまへもいさげしむ
 つすあひとていふにむらさきも
 わがあはれ目あるもいさげしむ
 いさけあはれ人のさむ人もあはれ
 めもあはれし物とていさげしむ
 うらまへもいさげしむ
 常におもひもいさげしむ
 じよあはれもいさげしむ
 どのくこのあはれもいさげしむ
 かこいさげしむ
 佛津の奇物にせむ

このみ信ぜむつよにもいさげしむ
 と念はれ信ぜむあるもいさげしむ
 安らふも信ぜむ大方便のいさげしむ
 信ぜむもいさげしむ

無畏河海無間源諸教聚

源氏桐壺小あはれう目へつてあり

源氏桐壺小あはれう目へつてあり

源氏桐壺小あはれう目へつてあり

源氏桐壺小あはれう目へつてあり

源氏桐壺小あはれう目へつてあり

源氏桐壺小あはれう目へつてあり

源氏桐壺小あはれう目へつてあり

論語述而

篇子不語怪力亂神

佛神の奇物語者傳記

佛經フツキヤウの物語

その石佛菩薩鬼神の神變奇特又神明の

不測フシキをりて其介位者化身の事も余あり

ざる物語傳記にも不思議多かるべし

りりと定めかたし

たし海に鳴呼フと云つたりしと云儀也

蟻アリのてしとあつたりて東西いろいろあるは

けりあり賦ウツあり考カウありありありありあり

はあり内家ありりりりりりりりりりりりり

は何事や生とじりり利とりりりりりりりり

何事や力チカラ賦ウツあり何事や力チカラ賦ウツあり

を考カウに非ヒありありそのあり事コト迷マヨりて念ネン

はるにさサまマひヒあアれレををままははああひひぐぐ何ナニのためタメにニ

ひりあアんンけケんンりリ物モノををここれれをを名ナ利リとト

おぼオボもモてテ先サキ途チはハちチりリ事コトををりリ思オモひヒををりリ

とトりリををりリ人ヒトををりリここれれをを思オモひヒををりリ常ジョウ儀ギありリ

しシをを思オモひヒてテ変ヘン化ケのノ理リををりリ也ヤ

蟻アリはハしシとトあアつツまマりリてテ文モン選セン蟻アリ同ドウとト云ク

豫章文集夫執功名會クニ聘クニ一ヒト世セ其カとト蟻アリ亦モ

有ア辯ベン乎ヤ白ハク蟻アリ戰セン酥ソ千里千里血血黃黄梁梁炊炊熟熟百年百年休休功功

成名成名遂遂人間人間世世欲欲夢夢槐槐安安向向社社游游

唐は淳于棼が家より古槐樹あり酒は酔あり
たれたたきけ起してゆりてあせり爰よりあ
はるありて槐安國王よりびじふふふの棼車よ
きて槐樹のわに到つて一つの穴より入城門有
其親と大槐安國よりあり殿上よりわたりて
國より王よりいんて棼と措くと金枝公主と妻
あつたりあり富り事かざりこれかてち柯郡
は礼ありゆきそむむむむむとて棼をけり
車馬ちもいにはありていふもあつたりひゆ
郡小到りて政とすり事二十年宿よりみ位よ
のわりて富きとありあり男子より女子二人
とありていふととほいひて夫ぬ棼國よりゆり
ていふと

盤龍岡より葬かかある人かを掘りて國よ
むむむのあれ宗廟れむむむむむむむむ
たれ王俄より棼をけりいふむむむむむむ
はありはははははははははははははははは
あかきとむむむむむむむむむむむむむむ
ひてむむむむむむむむむむむむむむむむ
槐穴とむむむむむむむむむむむむむむむ
むむむむむむむむむむむむむむむむむ
幾千万のふ教とむむむむむむむむむむむ
是國より人とも也又一つ穴とむむむむむ
むむむのむむむむむむむむむむむむむむ
又一穴ありむむむむむむむむむむむむむ
龍蛇は播きむむむむむむむむむむむむ

似たりしは盤龍固也ハシロウカウ 禁反中フシ 然れども瓜瓞カク として
人をしてけりしとて穴アノ としてあきく此秋風の傲アノ ありと
ありと槐樹クワイジュ ゆりきり動ウツク 朝アサ の穴アノ としてんば蟻
ふれきり成ナリ してけりかきりしとて家廟ケバウ たりと
つひありんかきりしとてい半陳翰チンカン が太
槐宮クワイキウ 記キ といえたり今は後小人間コノヒト 世ヨ と蟻アリ のあつ
まるにありしとていりれりしとてありしとありしとありし

變化シゲ の理リ として 莊子シ 云ク 已ニ 化シ 生ス 又ニ 化シ 死ス 生物シ 衰ス 之レ 人類
悲シ 之ヲ 注物シ 之レ 初生シ 本無シ 而有シ 又化シ 而死ス 則チ 是レ 既有シ 而
無シ 日ニ 乎シ 一理ニ 而シテ 人物ノ 類ノ 自ラ 以テ 為ス 悲シ 哀シ 愚シ 惑シ 也ナリ
は後力カキ 結ス 帯ス 帝ノ 位ニ ありんかきりしとて思フ ひて變化

の理リ としてありしとていりしとていりしとていりしとていりしとて
莊子シ が後小蝶シ ありしとて周ノ かりし事コト として
さめて周ノ かりし事コト として蝶ノ かりし事コト としてさめて是レ 物
化シ してさめて瓜ノ 瓞ノ 郭ノ 子ノ 玄ノ 注ノ 小蝶ノ かりし事コト として
ありしとていりしとていりしとていりしとていりしとて
て蝶ノ をさめていりしとていりしとていりしとていりしとて
の蝶ノ ありしとていりしとていりしとていりしとていりしとて
百年ノ のるをさめてさめてさめてさめてさめてさめてさめてさめて
いりしとていりしとていりしとていりしとていりしとていりしとて
港ノ 於テ 弘ノ 決ノ して莊子シ 後小蝶シ ありしとて南ノ 園ノ の苑
菜ノ ありしとていりしとていりしとていりしとていりしとて
百年ノ ありしとていりしとていりしとていりしとていりしとて

おわてと秘とのせりふあらん人を獲よ
わらうとくふうゆくはまゝにらるる方すふ
ありてお物れ我にうかをねと改まるべ
受志實は道理也と記すしふ亦は異端は
度よけりく風とてふ言とてくしとて男に
きくわらぬ漫説もあつてはとるはる

ほれくわらる人のつらなるんまゝにゆ
わらうとくふうゆくはまゝにらるる方すふ
受志實は道理也と記すしふ亦は異端は
度よけりく風とてふ言とてくしとて男に
きくわらぬ漫説もあつてはとるはる

ふもあつて人よたりふれ物よあつてひ一夜の
うらみ一交とよつてふまゝに定まらるる
分のみごりにたがりて済夫おひけかまゝに
はよも解つて酔の中に交とをき走りてつを
りくわらぬ漫説もあつてはとるはる
いまも戒めたるを縁とてれをさるる方
しよとてあつてふまゝに定まらるる
のくわらぬ漫説もあつてはとるはる
お法縁とてあつてふまゝに定まらるる
生活人事 止観の四日縁務有る一生活二
人事三伎能四学問とてあつて
生活の男命とてあつてはとるはる

車よ海よりつらとあづる也 依結いよつづね藝
能より学問の内弁の云とよみ万也かおるは
こも活我人のありりとなればきそやありと
ありも止観の教あり

智顓字德安天台大師とも智者大師とも
也南岳思大和尚も翻法とていづく自解發
明は人よて法華の旨とていづくも二
代の帝よとていづく師範とていづく存よ天台山
佛龍寺に住せ妙法蓮華經の題号とて釈と
とていづく玄義とていづく十卷あり經の文釈とて釈と
とていづく文句とていづく十卷あり其とていづく心のとていづく
とていづく摩訶止観とていづく摩訶止観大也

翻とていづく十卷あり廿三卷とていづく天台
と懸河流瀉の辨をたれ其説をとていづく
此を子章安灌頂筆記とていづくを妙樂大師
湛然去義と注とていづく秋藏とていづく十卷あり
文句とていづくとていづくを止観と
とていづく弘決とていづく輔行記とていづく十卷あり
三十卷とていづくを合て三大部とていづく
天台六十卷とていづく也弘決の内多く儒書莊老
諸家此説とていづく日本めて具平親王仲
範朝臣是とていづく外勅抄と名つけたり

天台家系図

惠文エモン 思大シダイ 智者チヤ 灌頂カンテイ 智威チイ

惠威エイ 玄朗ゲンロウ 湛然タンゼン 道邃ドウスイ 最澄サイテイ 傳教デンケウ 大師

世のねむりあやうなりあやうなるをきこふるこび
ありて人あやくりあやうなる中又知れど法
昨のまじりていひ入るすみまはうあは
やもしとめれきうきあはしは師の人
うきくであうねん

世のねむりあやうなり 富を成勢華

衆の入りなり 戒の礼葬結款礼

多財あり戒の禮冠礼祝儀の財もあり

世中にほほは人あつてあはるひささよといひあ
れ事いふふつよまあねんねんあはるあは
ちりて人よも措きうとらひきうなるらさうなる
れ礼こしにさうあはるひささといひは法師を
世の人あつていひさう尋ねるそりかりあ
んといひゆるさうとぞいひあはるあは

とやうの事よのちりしきいとしひのりおも
てきまらそめしきまの事いしかりたるまを志
らぬ人の心かこしむる人の心をあつ付く
りしきいしひのちりしきいしきいしきいし
らるるちりしきいしひのちりしきいしきいし
れどしきいしきいしきいしきいしきいし
をれどしきいしきいしきいしきいしきいし
い油やうの事 新樂府、時勢振と去て
とゆうの事いしきいしきいしきいしきいし

何事も入らぬ事いしきいしきいしきいしきいし

ありし事いしきいしきいしきいしきいしきいし
余よりいしきいしきいしきいしきいしきいし
よのちりしきいしきいしきいしきいしきいし
かこしきいしきいしきいしきいしきいしきいし
くありしきいしきいしきいしきいしきいしきいし
りぬ事いしきいしきいしきいしきいしきいし
よのちりしきいしきいしきいしきいしきいし
うありしきいしきいしきいしきいしきいしきいし
そと官給の事いしきいしきいしきいしきいしきいし
也る事いしきいしきいしきいしきいしきいしきいし
よのちりしきいしきいしきいしきいしきいしきいし
そと官給の事いしきいしきいしきいしきいしきいし

漢和慶馬の

景帝いしきいしきいしきいしきいしきいし
馬いしきいしきいしきいしきいしきいしきいし
大廟いしきいしきいしきいしきいしきいしきいし

口にもく 礼記の容止と云ふ人不同容不
先奉^ツのり^ツの^ツを^ツへ

人^ゴの^レ叙^カ力^カの^レう^ウの^レ美^カ事^カの^レも^モと^モに^レ此^レの^レ法^ホ師^シ
を^ツ兵^ツの^レ道^ツを^ツて^ツ夷^エハ^レウ^レひ^レく^レ也^カの^レ也^カの^レ佛^フ法^フ知^チ
つ^ツり^ツき^ツを^ツく^ツ一^ツ連^レ歌^カ一^ツ管^イ絃^チを^ツて^ツあ^ツり^ツ
され^レど^レあ^ツる^ツの^レを^ツあ^ツれ^レが^レた^ツより^レの^レ人^ニは^レ思^ヒひ^海
ら^レも^レぬ^レ一^ツ法^フ師^シの^レも^モあ^ツる^ツに^レ上^シ進^シ難^カ及^テ人^ニ
多^クん^レと^レあ^ツる^ツを^ツて^ツ武^ブと^レの^レ人^ニは^レ知^チら^レず^レ
百^モ一^ツ比^ヒ戦^セて^ツ百^モ度^ツ勝^ツつ^ツと^ツた^ツ武^ブ勇^{ユウ}は^レみ^レ以^テ定^ス
る^ツ一^ツに^レ及^ツハ^レ運^ウの^レ家^カと^ツあ^ツる^ツに^レさ^ツる^ツ時

勇^{ユウ}者^{シヤ}も^レあ^ツる^ツに^レは^レく^ツの^レ人^ニを^ツ一^ツ兵^{ヘイ}つ^ツと^ツあ^ツる^ツに^レ
て^ツは^ツわ^レく^ツ敵^{テク}も^レ悔^{クワイ}も^レ死^シと^ツや^ツら^ツく^ツて^ツは^ツ始^シと^ツ
み^レ以^テあ^ツる^ツの^レも^モさ^ツる^ツに^レい^ツく^ツん^ツや^ツる^ツ武^ブも^レ
を^ツる^ツ人^ニは^レ人^ニ傷^ケを^ツて^ツ禽^キ獸^{ジュウ}も^レあ^ツる^ツに^レ
し^レも^レ家^カも^レ何^ニも^レひ^レく^ツ好^{コウ}て^ツ益^{エキ}も^レた^ツる^ツ也^カ
は^レ法^フ師^シのみ^ニも^レあ^ツる^ツに^レさ^ツる^ツに^レ別^{ベツ}
は^レく^ツあ^ツる^ツに^レあ^ツり^ツ
夷^エ愛^{アイ}も^レて^ツは^ツ田^イ舎^カの^レ武^ブ士^シと^ツさ^ツる^ツ
上^シ進^シ難^カ 公^ク也^カ 公^ク也^カ 公^ク也^カ 公^ク也^カ 公^ク也^カ 公^ク也^カ 公^ク也^カ
武^ブと^レこの^レ人^ニは^レあ^ツり^ツ 左^サ傳^{デン}衛^{エイ}公^ク子^シ州^{シュウ}吁^{キョ}騭^シ
人^ニ之^レ子^シ也^カ有^チ電^{デン}而^{シテ}好^ク兵^{ヘイ}又^ツ曰^ク州^{シュウ}吁^{キョ}阻^ソ兵^{ヘイ}而^{シテ}安^ス忍^{ニン}阻^ソ
兵^{ヘイ}無^ク衆^{シュウ}安^ス忍^{ニン}無^ク親^{シン}衆^{シュウ}叛^{ヘン}親^{シン}離^リ難^{ナン}以^テ濟^{セイ}矣^カ夫^レ兵^{ヘイ}行^ケ火

也弗戢將自焚也

百戰百勝非善也善者不戰而屈人之兵善之善者也

山谷待百戰百勝不如一忠

兵法曰夫善戰者先為不戰而後戰

李陵與匈奴單于連戰十有餘日一國共攻而困

之轉鬪千里矢盡道窮救兵不至士卒死傷如積

陵未沒時使有未報漢公卿王侯皆奉觴上壽後

數日陵敗

敵之降之通鑑綱目第二劉友益書法曰

亡國之君其辭五死之上也執虜次之以飯次

之獲次之降為下

人倫之禽獸之類孟子離婁上篇

曰爭地以戰殺人盈野爭城以戰殺人盈城此所

謂率土地而食入肉罪不容於死故善戰者服上

刑連諸侯者次之辟草萊任土地者次之

莊子祝劍篇曰庶人之劍蓬頭突鬚垂冠曼

胡之纓短後之衣瞋目而語難相擊於前上

斬頭領下決肺肝壯庶人之劍無異於鬪雞

一旦命已絕矣無所用於國豈今天下有大王有天子

之位而好庶人之劍臣竊為大王薄之

是以其家不業也夫古之聖王治國者必先

其家後其國也夫古之聖王治國者必先其家

後其國也夫古之聖王治國者必先其家後其國也

夫古之聖王治國者必先其家後其國也夫古之聖王治國者必先其家後其國也

なほこの世のいひが事也あふふとて位より
あうずゆとありたけの益ありて害あ
つこころは兵れたの終の名と金ありて
唐は密尤が戦とありめり 呉起龐涓も兵法
とありていふも或は楚人のこころれ或は馬
凌よあがる項ねの六年の戦よ常よ敗れし
北征の大將として葵苑の太陽よあつて
あつて馬謖の蜀の名将ありた街亭よあつ
て符堅が百萬の英雄とひきとりては公山の
弟よとてあつて敵の兵ありあやゆりたは
あつてのふとて運よ棄られは勇者なりす

こころれ破竹のつとわいとひてま
なりとつとあも弟よた兵よあつて今
のはいもの人としてらん攻城即戦せん
杯ひひあつてあつてあつて人のあつて
こころの罪と刑よあつてあつて君子より
まは犬やとて牙とありてせし牛角とあり
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
唐人の叙れ剛毅の小おねとつとあつて
兵れあつてあつてあつてあつてあつて
あつて肥馬長槍僕従あつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて

市人曰三世將たけはなまのいしあうりいん
まあまのさしとてえりかにまふのまへ

唇風隣まをどの給も文字もさへいあまや
うしとていふがえささよりも宿れあり
のつてまへえゆる也大方もそを潤なめそも心
とりとていふ事いふぬぐいぬのこよれ物をと
づいともあはれ換ぞとんだめそをまあを
つよくまなふまなまめけしめんそを
まよしとてあまをわつていふのまあを
つよまありありとていふのまあをい
まかまはいふもなるそを物とていふ
まあり

うまのの表紙いとく換がりがりび
けいひいし物やが飛い上下の螺鈿の軸
貝落すほそいすれりやうい
のうそをてい一都ともなるかき
やうにもありぬとてい
が物成りぬは一具はさくんとす
そまののすり半も不をかりし
いひともみぬくもいもな

のまのわりりらあ〜さ〜るりあのこと
〜さ〜てお置たりらあり〜のま〜い〜は
りら也内裏遠〜るるもるる〜るりら
とら〜は事なり〜或は〜也先賢の
つられるゆがはみは章改ら〜け〜る
の〜ぞゆれ

うほもの 流は〜るる〜衆の
字とら〜もの〜流り 倭名唐韻云羅魯何
間云良一綺羅也らはるる〜るら〜あり
云蟬翼 衆の流はるら〜衆の金紗お〜るら
流河 小野宮大納言能實はる流也十四歳
〜て春山よ竹字〜る高野のわりらと

流河のありらめ流道とち〜るらと春る
ら〜ふ又ハ感室〜も号之貞治二年は流河七
十餘歳は流河先因折政良基〜河谷〜
近代おち〜異風〜成と正風新〜
後世の巻鑑〜思〜其河谷と愚
河谷注〜名は〜石光孝末流鳥井小路経
流が流るり
小野宮大納言能實 全春 仁春 仁尊 仁春 泰尋
流河の魚好同時の人也其詞〜ら〜流河は
流らん乃ち〜螺鈿軸と巻本は純に貝と
より入〜る也世継と〜るのあふひを
つら〜るら螺鈿の箱〜るら

ひらり心地 なるり

おほいしう おほいしう ぬれ家法にてよき

弘融僧都

権少僧都弘融文保二年十月於
押小路亭随少将為仲入道受吉

今和方集訓説云云建武比与兼好房有因縁

故弘融古今集云云仁和寺ノ居所ニ預置久貞和

三年伊賀国佛性寺遍照院居住時歳六十一

いさめなる 深氏ふよるひのなるくと云

似るらと抄ふよるひのなるらるる也

内外なる 内典外典也佛經とハ内典

儒書百家と外典とす天台止観は十次中

二版け毛詩も音篇なり六篇亡し周

礼の六篇も冬官け大学の格物に徳を

くは類多の 九佛書と内典 儒書と外典とする事

浮屠氏よりいふ私を天下に論よあつた智

人なる天下古今法を常とすべから

まふと經も典もあつた經典の二字これ

つ神と海り堯典舜典といひ五經六經といふ

ハ義なり浮屠氏説とハ西域を脩多羅素

祖纜あんといふと翻譯まふものこと

かり經といひ典といひ新内外の字とを

つて尊異するは也又佛道は外といひ推して

外道といふは也皆一人の私也され堯舜

文武の道よあつらひ若とは異端と名づく
又史鏡といふ書には外道北都とたそ
浮屠と載りたりといふもいとふか
りおたなりなり

竹林院入道左大臣敏太政大臣にあがり
物ゆきこわりおのぢんをれもつらげ色
一とよそやみけんそて出家しつらり
大臣敏太政大臣と并んぬり相國のや
りたりと云はれぬ悔ありと云ふは
月満ていをも物ありりていふなり

事さだめはよりこりていふなり

竹林院 西園寺公衡公竹林院左府と号す
一たりと 一上は左大臣のこも也左大臣実白もれ
大臣一とより節令は内弁とつとむり也
洞院左大臣 洞院實雄公従一位左大臣山階と号す
相國 大臣大臣のこも也
亢龍は悔 易乾卦上九亢龍有悔象曰亢竜
有悔盈不可久也 又曰亢龍有悔与時偕極亢
為言也知進而不知退知存而不知亡知得而不知喪
月みちてハ 易豐卦日中則昃月盈則食天地盈
虚与時消息 釈名云月缺也滿則缺
物さりりりては 威者必衰

ハレ礼儀の理をいり、鑑念は右大臣實朝初
人のいさめをさうば頼朝の大納言をきらめ、
まとも我ハ右府おれん、まて終は唐の
位よのかりをなす、あに鶴岡は清ては
くして公曉が難あり、およつらん人上病
下鴨、おろさく、竹林流の古住おとく、極限の
滅あり、さうあり

法頭之藏は天竺より来たる、
病ありては漢の念を、
法頭の人を國とみ、
弘明僧都優く、
法師のやうにもあり、
えー

法頭 高僧傳第三梁惠敏所撰法頭傳曰、
法頭姓龔平陽武陽人有三兄並髻亂而亡父恐禍
及頭三歲便度為沙弥居家數年病篤欲死因以
送還寺信宿便差不肯彼故其母欲見之不能得
後為立小屋於門外以擬去未十歲遭父憂叔
父以其母寡獨不立逼使還俗頭曰本不以有父
出家也正欲遠塵離俗故入道耳叔父善其言乃
止頃之母喪至性過人葬事畢仍即還寺嘗与

同學數十人於田中刈稻時有飢賊欲奪其穀諸
沙弥悉奔走唯頭獨留語賊曰若欲須殺隨意所
取但君等昔不布施故致飢貧今復奪人恐來世
彌甚貪道願為君憂身言訖即還賊奔殺而去衆
僧數百人莫不歎服及受大戒志行明敏儀軌整
肅常慨經律并閑指意尋求以晉隆安三年與同
學惠景道整惠應惠鬼等發自長安西渡流沙上
無飛鳥下無走獸四顧茫茫莫測所之唯視日以
准東西望人骨以標行路耳屢有熱風惡鬼遇之
必死願任緣委命直過險難有頃至葱嶺之冬
夏積雪有惡龍吐毒風雨沙磧山路艱危壁立
千仞昔有人鑿石通路傍施梯道凡度七百餘

所又張懸繩過河數十餘處皆漢張騫并英
所不至也次度小雪山遇寒風暴起惠景噤
戰不能前語頭曰吾其死矣卿可前去勿得
俱殞言絕而卒頭撫之泣曰本圖不果命也
奈何後自力孤行遂過山險凡所經歷三十
餘國將至天竺去王舍城三十餘里有一寺
逼暝過之頭明且欲詣耆闍崛山寺僧諫曰
路甚艱阻且多黑師子亟經噉人何由可至
頭曰遠涉數萬誓到靈鷲身命不期出息非
保豈可使積年之誠既至而廢耶雖有險難
吾不懼也衆莫能止乃遣兩僧送之頭既至
山日將曛夕欲遂停宿兩僧危懼捨之而還

頭獨畱山中燒香禮拜翹觶舊跡如覩聖儀
至夜有三黑師子來蹲頭前舐脣搖尾頭誦
經不輟一心念佛師子乃低頭下尾伏頭足
前頭以手摩之咒曰若欲相害待我誦竟若
見試者可便退矣師子良久乃去明晨遂返
路窮幽棧止有一逕通行未至里餘忽逢一
道人年可九十容服廉素而神氣雋遠頭雖
覺其顛高而不悟是神人後又逢一少僧頭
問云問者年是誰耶答云頭陀迦葉大弟子
也頭方大悅恨更追至山所有橫石塞于室
口遂不得入頭流涕而去進至迦施國上有
白耳龍每于衆僧約令國內豐熟皆有信効

沙門爲起龍舍并設福食每至夏坐訖龍輒
化作一小蛇兩身悉白象成截是龍以銅盃
盛酪置菴於中從上座至下行之遍乃化去
年輒一出顯亦親見後至中天竺於摩竭提
邑波連弗河育王塔南天王寺得摩訶僧祇
律又得薩婆多律抄雜阿毘曇心經經方等
泥洹經等頭畱三年學梵治梵書方躬自書
寫於是持經像寄附高客到師子國頭同旅
十餘或畱或亡願影唯已常懷悲慨忽於玉
像前見商人以晉地一白團絹扇供養不覺
愕然下淚停二年復得彌沙塞律長雅二舍
及雜藏本並漢土所無既而附商人大舶循

海而還船有二百許人值暴風水入象皆惶遽
即取雜物棄之頭恐棄其經像唯一心念觀世
音及飯食漢土象僧船任風而去得無傷壞經
十餘日達耶婆提國停五月後隨他商東適廣
州舉帆二十餘日夜忽大風合船震懼衆咸議
曰坐載此沙門使我等狼狽不可以一人故令
一衆俱亡共欲推之法頭袒越厲聲呵商人曰
汝若下此沙門亦應下我不尔便當見然漢地
帝王奉佛敬僧我至彼告王必當罪汝商人相
視失色僂俛而止既水盡糧竭唯任風流忽
至岸見菘蘿菜依然知是漢地但未測何方即
乘船入浦尋村見獵者二人頭問此是何地耶

獵人曰此是青州長廣郡牢山南岸獵人還以
告太守李嶷素敬信忽聞沙門遠至躬自迎
勞頭持經像隨還頃之欲南飯青州刺史清留
過冬頭曰貧道投身於不及之地志在弘通所
期未果不得久停遂南造京師就外國禪師仏
馱跋陀於道場寺譯出摩訶僧祇律方等涅槃
經雜阿毘曇心要百餘万言頭既出大涅槃經
流布教化咸使見聞有一家失其姓名居近朱
雀門世奉正化自寫一部讀誦供養無別經室
与雜書共屋後風火忽起延及其家資物皆盡
唯涅槃經儼然具存煨燼不侵卷色可改京師
共傳咸歎神妙其餘經律未譯後至荊州卒於

辛寺春秋八十有六象成勤惜其遊履諸國別
方大傳焉

一切經廣字函高僧法顯傳一卷 東晉沙門

記遊天竺事 法顯到獅子國一僧伽藍名無畏

山有五千僧起一佛殿金銀刻鏤悉以象宝

中有二青玉像高三丈許通身七宝焰光威

相嚴顯非言所載右掌中有一無價宝珠法

顯去漢地積年所与交接悉異域人山川草

木举目無舊又同行分披或流或亡顧影唯

已心常懷悲忽於社玉像邊見高人以白絹
扇供養不覺悽然淚下滿目

編年通論第四東晉義熙七年法師法顯
自西域還初顯至獅子國同侶皆無存翩然
自止會有以純扇供佛者顯見之動東顧之
思

フルサト 加心 支那と云

漢の食 支那と上唐虞三代と云

五帝まで教子年は乃代の号は乃云

て漢の心唐の心と云 支那の地云

と漢の世と云 乃の乃云 乃の乃云

乃の乃云 乃の乃云 乃の乃云

乃の乃云 乃の乃云 乃の乃云

和漢といひ倭唐といふもけ義あり
人其國 他國といふ春日明神の託宣も他
國より我國の他人より我人のよりなり

人のあはれをなかるゝ縁はゆるぎもあはれ
これよあつゝ正妻の人をもちんとのも
まはゆかゝ福と人の賢とてやせの榮
常也つらてとらるあふ人いたるゝ賢を人
とててもとなくじおわさぬる利とらんがあ
かゝこの利をうけどゆさりて名とらん
ととそふをのれがらんまをくゆよりては

物とあはれをありぬい人ト愚の性つるゝは
つらりて小利とも辨まへかゝはかりも賢と
言べゝあね人の子孫とて大徳とりらる則
狂人也 悪人の子孫とて人ともあはれ悪人也
賢とてあはれ賢のさへい辨と学を辨の徒
うり物とも賢とまかづんと賢とつら
人おんすあは 廉直也

正妻の人をもちん 論語十室之邑有
忠信といひ孟子性善ありといふ也
賢とてそとやじ 論語里仁篇見賢思齊焉
是石賢而内自省也
賢をとりて 大学人々有技媚疾以悪人

る彦聖而違之俾不通
下愚此性 論語湯貨篇上智与下愚不移

狂人のこと 狂人走不狂人走

淮南子曰狂者東走逐者東走東走則同所以未定
別異

惡人者善人 楊子法言二曰人之性也善惡混
脩其善則為善人脩其惡則為惡人

驥と馬と 楊子法言一曰晞驥と馬亦驥
乘也晞類と人亦類と徒也
舜と禹と 孟子滕文公上云類洎曰舜何人
也予何人也 有為者亦如是

孟子告子下云曹交問云人皆可以為堯舜有諸
孟子曰堯舜と道孝弟而已矣子服堯と服誦堯
と言行堯と行是堯而已矣子服桀と服誦桀と
言行桀と行是桀而已矣

惟純中納言ハ風月好方とある人也 一可精進
として清夜うちありして寺法師の園作傍に同
宿してゆりりみ文保と三井寺屋れ 一附
坊よりあひして西坊とバと 法師とてそつれ

どちのあはれはとよりいひわう〜こころはめく
いれりいづ〜秀句也なり

惟^{コト}繼^{ツグ} 一本又伊^イ弼^{ツグ}と云ハ振也惟^{コト}繼^{ツグ}中納言

平^{ヘイ}氏^シ西^シ洞^{トウ}院^{イン}嫡^{チク}流^{リウ}也元^{ゲン}德^{トク}二^ニ年^{ネン}任^ニ權^{ケン}中^{チュウ}納^{ナク}言^{ゴン}建

武^ブ二^ニ年^{ネン}任^ニ文^{モン}章^{シヤウ}博^{ハク}士^シ曆^{リキ}應^{オウ}五^ゴ年^{ネン}出^{シュツ}家^ケ七^{シチ}十^{ジュウ}六^{ロク}歳^{サイ}

法^{ホフ}名^{メイ}宴^{エン}儀^ギ康^{カウ}永^{エイ}二^ニ年^{ネン}四^シ月^{ゲツ}十^{ジュウ}八^{ハチ}日^{ニチ}卒^{ソツ}七^{シチ}十^{ジュウ}八^{ハチ}歳^{サイ}

風^{フウ}月^{ゲツ}の才^{サイ} 詩^シ方^{ホウ}又^{マタ}章^{シヤウ}好^{コウ}也とあはれは

さうり小^コ多^タくあ^ある義^ギ也

圓^{エン}伊^イ僧^{ソウ}正^{シヤウ} 伊^イ平^{ヘイ}大^{ダイ}納^{ナク}言^{ゴン}孫^{ソク}也風^{フウ}雅^ヤ集^{シュ}も

前^{ゼン}権^{ケン}僧^{ソウ}正^{シヤウ}圓^{エン}伊^イの忍^{ニン}待^{テイ}恋^{レン}はんとよめるは

宵^{ユウ}はるハ誰^{タレ}も人^{ヒト}めはははめい〜ゆ〜はつ〜

さふあはれ〜らうらう

文^{ブン}保^{ホウ} 元^{ゲン}國^{クニ}院^{イン}統^{トウ}治^チ年^{ネン}号^{ゴウ} 文^{ブン}保^{ホウ}元^{ゲン}年^{ネン}四^シ月^{ゲツ}二^ニ十^{ジュウ}

五^ゴ日^{ニチ}山^{サン}門^{モン}より三^{サン}井^{セイ}寺^ジと云く〜あり

寺^ジ法^{ホフ}師^シ 法^{ホフ}山^{サン}おゆ〜と云もゆ〜あり

お耐^{ナヒ}々^々法^{ホフ}濟^ジ山^{サン}あり法^{ホフ}とた〜と云も寺^ジと

ゆ〜と云耐^{ナヒ}々^々圓^{エン}城^{シヤウ}寺^ジ也圓^{エン}城^{シヤウ}と云〜あり

三^{サン}井^{セイ}寺^ジの事^{コト}なり

秀^{シュウ}句^ク 秀^{シュウ}逸^{イツ}の詩^シ方^{ホウ}と云ふ義^ギもあはれは

〜ハ詠^{エイ}諧^{カイ}諸^{シュ}如^ニ戲^キ言^{ゴン}なり

下^{シモ}部^ベも酒^{シウ}の事^{コト}はら事^{コト}ハ人^{ヒト}と云ふ〜也字^ジ活^{カツ}は
ほけるとのこゑは具^グ覺^{カク}坊^{ボウ}と云ふをぬめ〜る

道トシせは僧ゼイとてうらうらとありたれを常トシよりし
つびより或カレ付キキ建カハ馬カハとをツカしりたれをカ
なりやどなり口はさくはとろく先トシ一夜さく
せよとて酒サカを出イきされはけしうをくしよ
と飲イぬたがうらうらと飲イせりひくちまをすれは
ふありくえとてやけしし程コま幅ハタの
やよとておの法ホウ師シ乃ニ無ム士シあアらラがガとてあ
ひし物モノはカがカまマじジひヒてヒ日ヒ言コトうウらラ山ヤマ中ナカの
あやまのぞとまうらとくしひとた刀ヤとひきぬえ
たれは人も清キヨき刀ヤぬえと夫ウらげあぐらと具ク
そん病ヤもとありてうらうら心ココロれく解トキる者モノよ
いゆをてゆりし物モノとくしひとた刀ヤぬえ

てとぬい押オシこし具クえ坊ボウよをて出イ坊ボウは口クチ揚トき
しし物モノつるものれとのれ解トキる事コト物モノと
ち名ナ傳デンじとする紙シぬきる右ミ刀ヤひあ
あし物モノはけりこしとてひきぎりよきと
あし物モノはけり山ヤマとちあし物モノはけり山ヤマ人ヒト
たがりて出イあし物モノはけり山ヤマとちあし物モノはけり山ヤマ
かたりつとてきりし物モノとちあし物モノはけり山ヤマ
あし物モノはけり山ヤマとちあし物モノはけり山ヤマ人ヒト
大オホ路ミチのあし物モノはけり山ヤマとちあし物モノはけり山ヤマ
もあし物モノはけり山ヤマとちあし物モノはけり山ヤマ人ヒト
あし物モノはけり山ヤマとちあし物モノはけり山ヤマ人ヒト
らき教キョウをたれが腰ウシきらと換カちりてとちあし物モノは

了時代やういひ侍屋ん是米あくるそらひ
くれはういひこころそせよあうらういひ侍り
くれそ侍りしし秘苑しりり

道風 河海云木工頭小野道風止四位下奉
峯守孫大宰大貳葛絃男

從四位上木工頭道風朝臣寛平五年生村上天皇
康保三年十月卒七十一歳

一説云延喜五年生

法お侍りし侍事よお侍實あきこし

てをあしじら也うらりの浮産は養りり

四條大納言 公任卿也康保三年生万壽三年

入道時六十一歳

道風死去ハ公任誕生ハ年也

和漢朗詠集 公任の撰りりおと下巻あり

唐人の詩文の詞を撰ぶよあそ和漢と号

そりり初文と和名と我ぬよち但和歌を公

任以後の人と加りり世傳大ニ條関白教通と

城君として朗詠といふ也あそこれりり

明ん

道風が朗詠ハ裁之が千字文よりハ新也千字

文ハ梁武帝が河内周興嗣が作りり武帝が鐘

繇王義之り多詠の内一千字と云ひひま

あ字又と寫しりり成ハ板ノ并く

よりて之を他摺と義之が千字文と云義成之死ん
武帝生りて時より六百年ありあり
は後世におありるものこと成りて減に類
はゆりこはは物類人の編る筆苑執記と
又ゆりこはは物類

少日与同学二三人遊山寺見一畫佛題其上曰孔子
讚吳道子畫蘓軾書或曰古畫必妙蓋袖而去哉有
強料事者曰孔子周人也漢明帝時佛法始入中國謂
孔子讚佛無理且吳道子唐人也安有吳道子畫而孔
子讚乎蘓軾生於千歲之後安得与孔子同時而書所
著之讚乎必後世好事者所為也子等皆年少不料
事信之右於一貴公子家見此畫乃稱古今第一而

為畫譜之首予審譜視之則所謂孔子讚者列子
所言孔子曰西方有大聖人名曰佛不言而信無為
而化之說也蘓軾取而書之前曰強料事者言可
付之一笑後世不知本末而強解事者皆此類也
又案沈苑曰宋愚人得燕石藏之以為大寶周容聞
而觀之主人齎七日端冕玄服發室葦櫃十重提巾
十襲容見悅而掩口胡盧而笑曰燕石也主人大怒
曰盲瞽之言蔽愈固守愈謹

かきつりやまゝさるるり

何河跡 其名たりけりぬ也

行形寺 元亨釈書十四云釈行園鎮西人寛弘

二年遊帝城頭戴宝冠身披革服都下呼為革

上人於賀茂神祠側營行願寺安千手像以園

衣革俗呼行願寺為革堂

松モウメイナラも少もの 松明也

連歌カサキのうせもの 賭

大納言法中ヲトヅルマロのりつみ 乙鶴トビ凡やとる後よ
あものぞ知て常よりカキ起し 或時出てカキキタリ帰来する

を法中トビいづるりけりぞとてトビ一ふやとるりぞめ

つりまらるるそふものふまやとる後ハ男ヲトコ法師ハツシ

又とられし神カミとてあらざといふゆゑん頭カビとてん

りぞとてカミ茶チヤやとるりけりぞとてカミ一ふやとるりぞめ

やまヤマり 安良ヤスラぬドノとちカ

神カミりきあらせとて ちチらラしシとてあはアハれレ休ヒユれレ

はハ辰チンのノ意イいイ急キウよヨ目メつツあアらラまマとてあはアハれレ茶チヤりリとて

あアらラまマとて人ヒトとあアらラまマとてあはアハれレ茶チヤりリとて

主人ウヂノハ何ナニもモのノ衣イ服フクとてとるりなナとて人ヒトよヨとて

うウれレハハまマとていイつツばバとてとるりなナとて人ヒトよヨとて

横川ヨウケン和尚ニヤウよヨ本ホ篇ヘンよヨ目メのノ字ジうウけケハハつツまマれレ文

字ジよヨとてゆユりリとて人ヒトのノ旨シメとてハハ篇ヘンとてはハりリもモとて

無常變易之境

涅槃經諸行無常是生滅法生滅々已宗滅為樂

天台四門有門空門非有非空門亦有亦空門

物之幻化有り 圓覺經幻身滅故幻滅亦滅

幻滅々故非幻不滅

何事有りて有りとも信有り 釈氏も成住壞空此

況あり

吉日も惡事をあそむに必凶有り 吉事も悪事をあそむに必凶有り

若し卦の吉ふあれども惡事をあそむれば必凶有り

卦の凶ふあれども善事をあそむれば必吉有り

~~~~~

事文類聚前集十二沉類時日無吉凶辨云古者

國家將有事乎我祀必先祝時日以定其期是用備

物於有司習儀於礼寺禱臻其慮而戒其誠非所以

定吉凶决勝負也後之惑者不詳其故推考時日妄

生穿鑿斯凡不單拘忌益深至使凡庶之家將欲越

一海墮折一段葦必待擇日而後為之楫一衛宇雍

一榛蕪必審方位而後為之且吉凶由人焉繫時日

夫四達之衢輪蹄未嘗息也五都之市貨賄未嘗絕

也万家之邑什斧未嘗斷也七雄之世戰伐未嘗已

也其凶也必由於人其吉也必由於人故吉人凶其吉

凶人吉其凶一於人之所為而已矣然則惑者不知其

在人也有一不吉則罪於時日矣且以不謀之將不練

士有能以日時勝者乎不耕之土不實之谷有能以

時日種者乎以鉄為金以石為玉有能以時日濟者乎  
是皆不能也則時日於人何有哉夫王者之兵以德勝  
霸者之兵以義勝其次以智其次以勇故古之名將未  
嘗不以壯而戰勝也未嘗不以壯而立功者也

羅浮子嘗應或人之求而著軍書題說其中論時日  
其畧曰孫子論兵也有五焉其二曰天々者陰陽寒  
暑時制也言用兵者必順乎天時也寒暑者冬夏之  
時也時制者陰陽四時之制所謂時日支干孤虛王  
相之說起自風后之孤虛書及范蠡之占歲此其所  
流傳未可知也則豈又可悉廢哉然今姑以不避陰  
陽拘忌者枚舉之夫往亡之日兵家所忌晉武帝曰  
我往彼亡吉孰大焉遂平慕容氏甲子者紂所亡

兵家忌之後魏武帝曰紂以甲子亡武王以甲子勝  
遂破賀麟鄧禹以六甲窮日理兵以敗劉均劉裕不  
避折竿沉幡之凶兆以擊盧循而支之皆是太公折  
箸毀龜之遺意也耶尉繚子曰黃帝刑德者人事  
而已矣孟子曰天時不如地利地利不如人和言盡  
于壯而已耶然又有一理康節先生出行不擇日或  
告之以不利則不行蓋曰人未言則不知既言則有  
知而必行故鬼神敵也是亦可不思乎嗚呼時日用  
捨存於其人矣

楚槌上卷六自文政十丁亥十二月九日黃昏  
起筆同十一日夜於燈下寫畢

中村直衛

